

【第三回】

さんぴつ

三筆

—— 空海を中心に ——

三筆

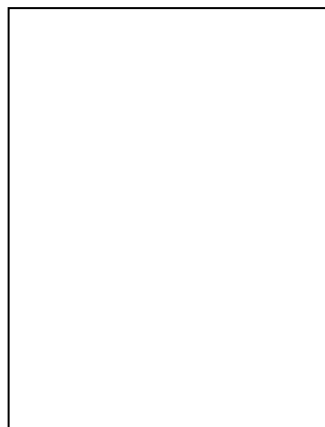
● 空海くわかい
(七七四〜八三五年)

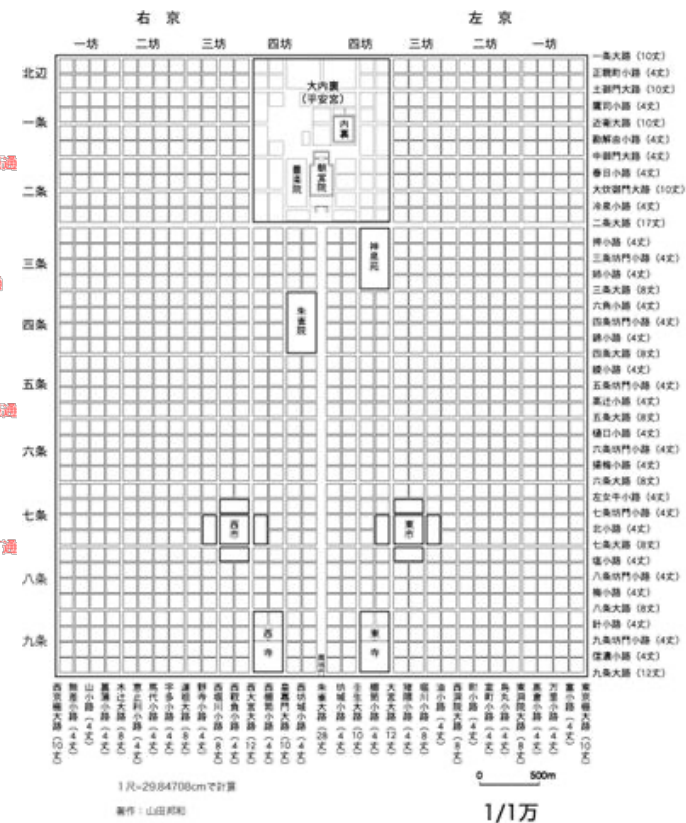
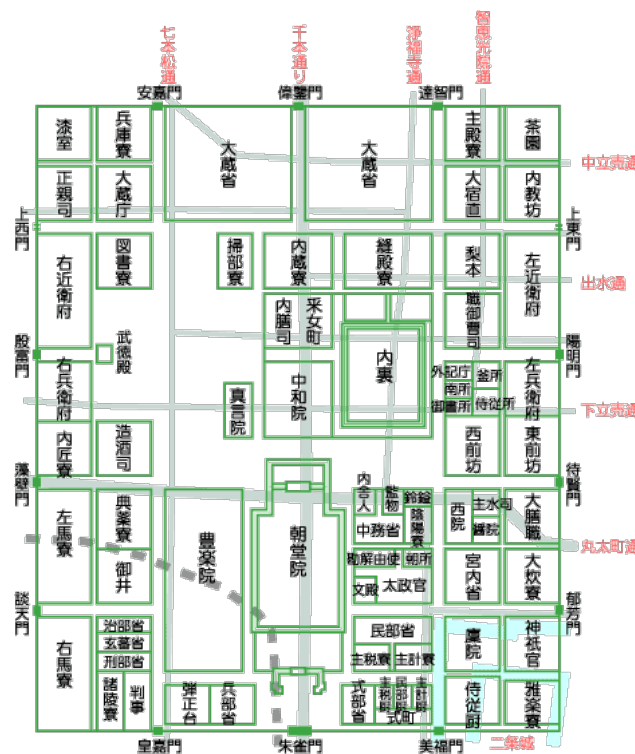
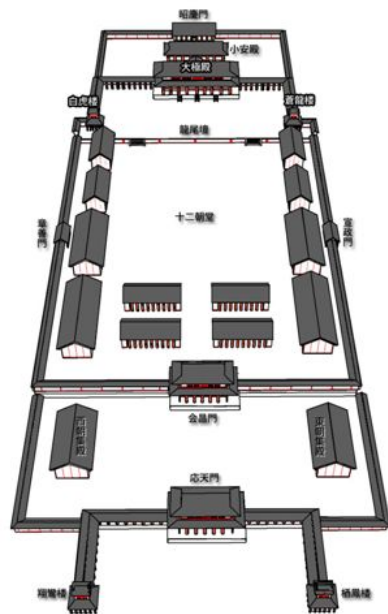


● 嵯峨天皇さが
(七八六〜八四二年)



● 橘逸勢たちばなのはやなり
(?〜八四二年)





長安城

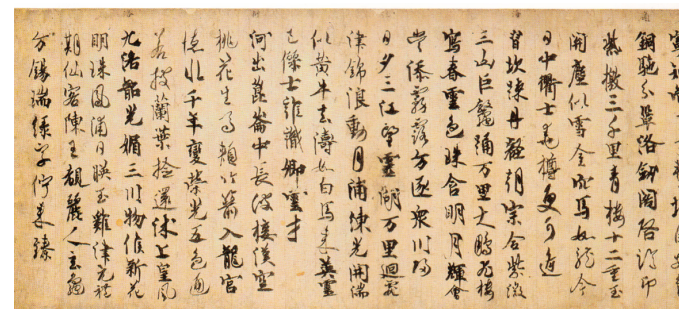




遣唐使



云 嵯峨天皇 李喬維泳淺巻 (部分)



26.2×235.1 cm

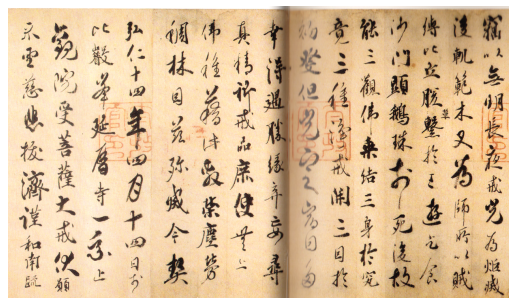
(海)
習坎疎丹壑 朝宗合紫微
三山巨龍踊 萬里大鵬飛
樓寫春雲色 珠含明月輝
會當添霧露 方逐衆川歸

料紙は縦簾紙。白麻紙。

唐の詩人李嶠 (六四四〜七二二年) の詩集「李嶠雜詠」を行書で書写した巻物。

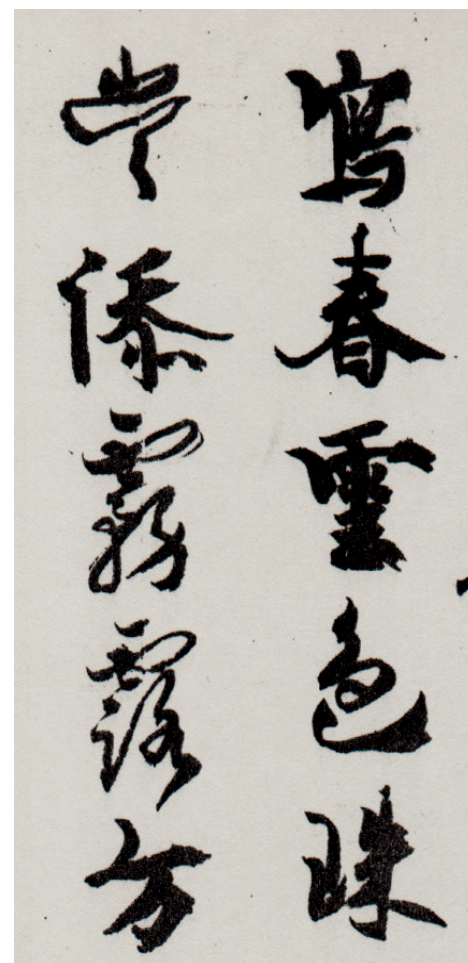
奈良時代から欧陽詢とその子欧陽通の系統の書が学ばれた。空海も欧陽詢の法帖を請来した。この作品は欧陽詢の影響の強い作品である。

嵯峨天皇筆 光定戒牒 (部分) (八三三年)



36.9×148.1 cm

竊以、無明長夜、戒光為炬、滅後軌範、木叉為師。所以賊縛比丘、脫羣繫於王遊、乞食沙門、顯鵝珠於死後。故能三觀弘乘、結三身於究竟、三種淨戒、開三因於初發。但光定宿因多幸、得遇勝緣、弃妄尋真、精研戒品、庶使無上仏種、藉此敷榮、塵勞欄林、因茲殄滅。今契弘仁十四年四月十四日、於比叡峰延曆寺一乘止観院、受菩薩大戒。伏願衆聖慈悲拔濟。謹和南疏。



(景十)



霧

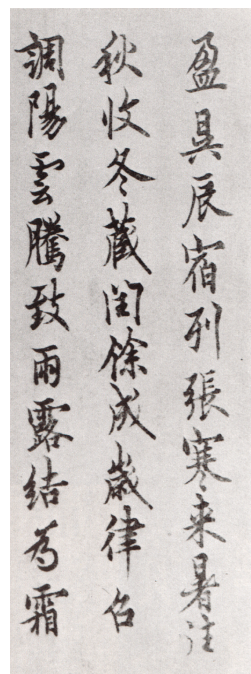


欧陽詢

雲

写春雲色珠
当添霧露方

欧陽詢行書千字文



(ほぼ原寸)



軌範

料紙は縦簾紙。白麻紙。

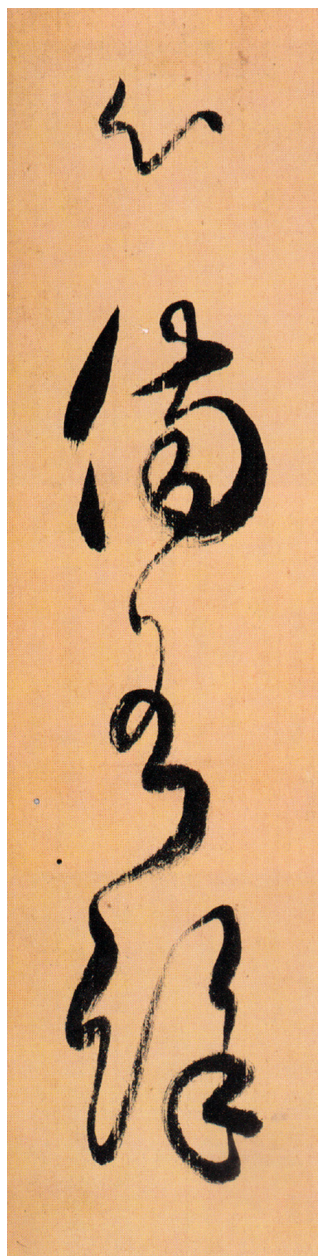
空海の書の影響が大きい。

比叡山の戒壇設立に功績のあった最澄の弟子光定の戒牒(受戒を証明する文章)に筆を執った一卷。



帷子辻 『絵本百物語』 竹原春泉画

嵯峨天皇の皇后 橘 嘉智子(壇林皇后)。
 橘逸勢は従兄弟。
 死後遺体を犬やカラスの餌にするため辻に放置さ
 せ、その様子を絵師に書かせたといわれる。帷子の
 辻のあたりか。帷子ノ辻より西を化野とよび、魔界
 といわれた。



心傷有餘

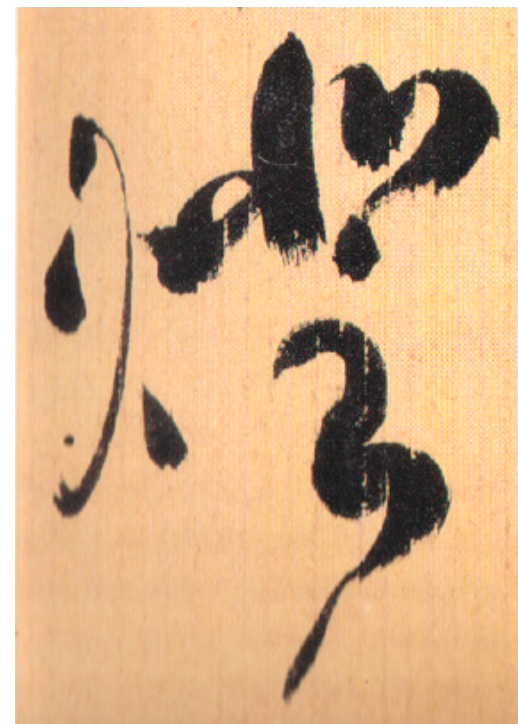


37.3×80.2 cm

哭澄上人。
 吁嗟双樹下、摂
 化契如々。惠遠
 名猶駐、支公業
 已虛。草深新
 廟塔、松掩旧
 禅居。燈焰残
 空座、香煙続
 像炉。蒼生橋梁
 少、緇侶律儀疎。
 法体何久住。塵
 心傷有餘。

ほぼ原寸

哭澄上人詩(澄上人を哭するの詩)
 最澄の死を悼む詩。一二句、五言排
 律。料紙は縦簾紙。空海の雑体書の影
 響が大きい。



燈

哭澄上人詩(八二二)

伝橘逸勢 いとないしんのうがんもん
伊都内親王願文（部分）（八三三）



29.7×340.9 cm

菩薩戒弟子從五位下藤原朝臣平子稽首和南。
奉納山階寺東院西堂香燈誑經料事。

側聞、惟父惟母、慈之悲
之者彼無上大覺、
為津為梁。提之濟之者
此無伽菩提。故有補
陀宝嚴、非莊嚴而真嚴、
姑喇仙峴、是妙說而浩
說。是以歸仰者、無愛
憎而普度、尊敬者、混
善惡而封威矜。大哉大悲。
難得議稱者矣。伏惟

楮紙行書で六十八行。

王羲之、唐代の書の影響。

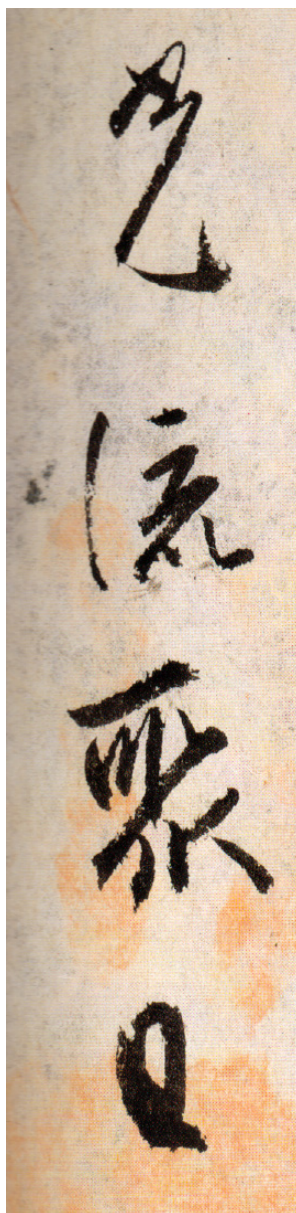
六朝の古法（王法）と唐の新しい
文化との融合。

空海との共通性、個性への動き。

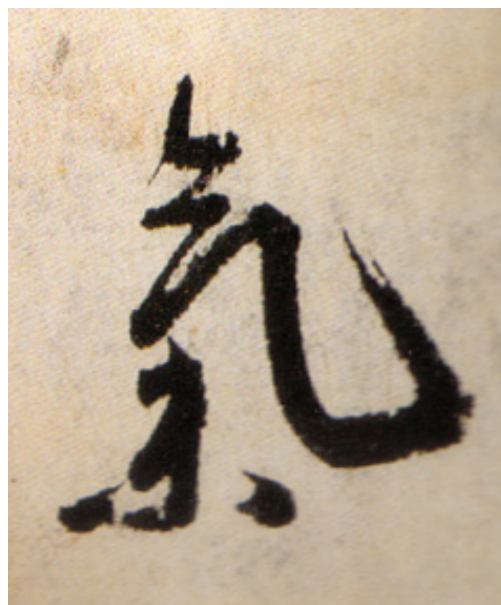
伊都内親王は桓武天皇第八皇女
ありわらのなりひら
で、在原業平の母。

興福寺東院西堂に壘田十六丁ほ
かを寄進した。そのときの願文。
楷行草書の各体を用いている。

ほぼ原寸

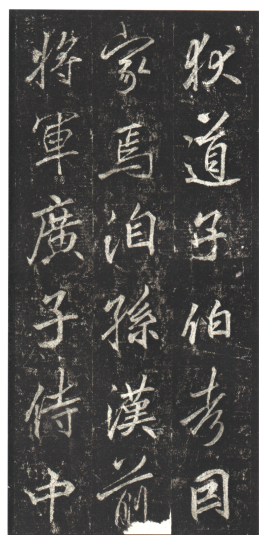


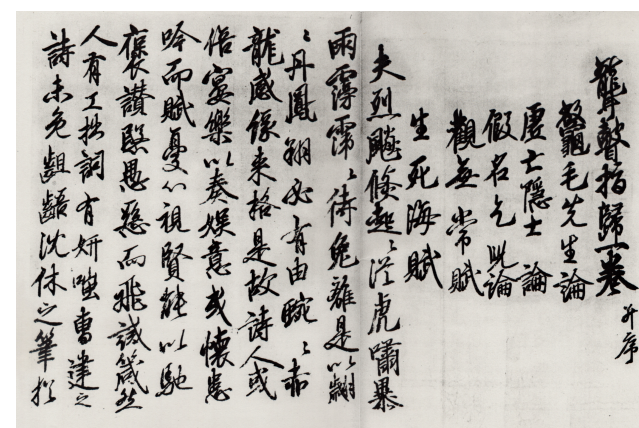
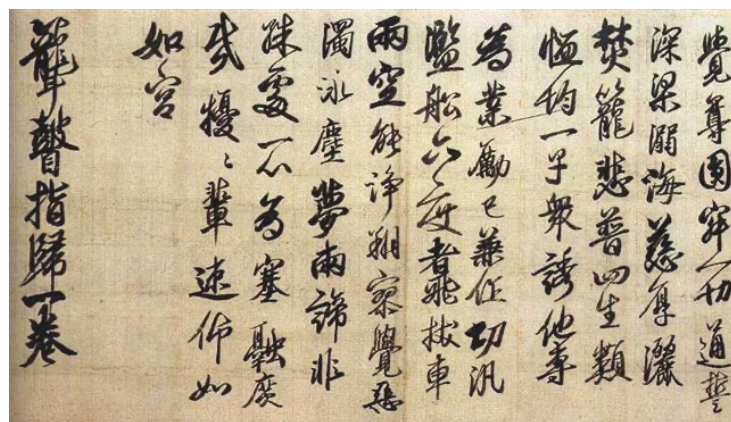
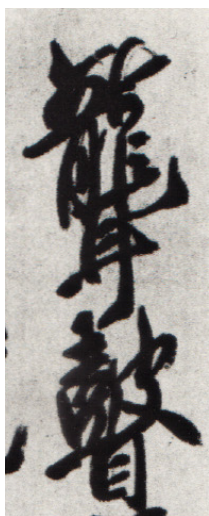
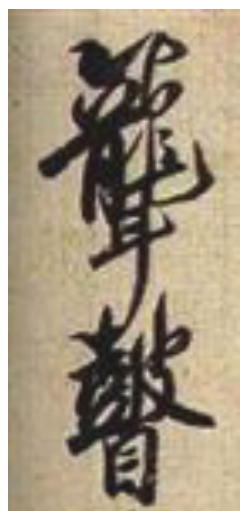
光流聚日



氣

李邕 りよう
李思訓碑





三教指帰概略 (丸岡愛市全訳)

『三教指帰』(儒・道・仏の教えがおもむくところを示す)
巻の上 併せて序

文章が起くるには必ずわけがある。

天は晴れると気象をあらわし、人は感じると筆を執る。
『八卦』の伏羲、『道德経』の老子、『詩経』の孔子、『楚辞』
の屈原も心に感じたから紙に書いたのである。

凡人と聖人とは生まれを異にし、昔と今とでは時代
を異にするというが、人が憤りを写(吐)くのはどうし
て経歴をいわないでよからうか。

われは十五のとき、母の兄で従五位下の学者阿刀氏に
師事し、教えを守り、学徳を仰ぎ求めた。

十八のとき、大学に遊学した。

螢の光や雪の明かりで学んだ車胤や孫康のように怠
惰に打ち勝ち、縄を首にかけたり錐で股を突いたりして
眠気を覚ました孫敬や蘇秦のように勤め励まないので怒
った。

ここに、一人の沙門がいた。われに『虚空蔵求聞持法』
を示し、その経を説いたのである。「もし人が法によつて
この真言を百万遍となえれば、ただちに一切の教えの意
味を暗記することができる」と。

そこで、大聖人仏陀の誠言を信じて木の棒で火を熾す
ような苦行を望んだのである。

阿波の国は大湊の岳に登り、土佐の国は室戸の崎で励
み唱えた。

谷はこだまを惜しむことなく、明星は輝いてわれを迎
え、遂には、「名を争うものは朝廷においてなし、利を争
うものは市場においてなす」といった栄華を瞬時に厭い
しりぞけ、山野の暮らしを朝夕ねがうようになったので
ある。

軽くて暖かい狐の毛皮を着た人や肥えて美しい馬に
乗った人をみては稲光のようにほかないのちを嘆き、
体の不自由な人やボロを着た人をみては因果応報を悲し
む思いが休みなくわきあがつて来、目に触れるものがわ
れを仏へと勧めたのである。

誰が風をつなぎ止めることができるか。

ここに数人の親しい知り合いがいて、われを五常
(仁・義・礼・智・信)の縄で縛り、われを断念さすの
に忠孝に背くというのである。

われは思うのである。物の心は一つではない。鳥や魚も
心は違う。そのため、天子は人を駆り立てるのに三種の

教えの網をつかう。言うところの、釈迦と老子と孔子で
ある。

巻の上 亀毛先生の論 一首

亀毛先生は生まれつき弁舌がさわやかで、姿かたちも
大きく立派であった。

中国のあらゆる古典に習熟し、太古の帝王や八卦につ
いても多くを暗記していた。

口を少し開けば枯れ木に花が咲き、一言わずかにしゃべ
れば骸骨も肉をつけるといった調子で、弁舌で有名な蘇
秦や晏平も彼と向かい合えば舌を巻き、張儀や郭象も遠
くから見ただけで声を吞むほどの雄弁家だった。

巻の中 虚亡隠士の論

虚亡隠士は先ほどから彼らの座席の側にいて愚者を
装い、知恵を隠し、和光同塵といった面持ちでいた。

ぼさぼさの蓬髪は登徒子の妻をこえ、ボロの綿入れは
仙人の董威以上だった。

足を投げ出し、傲然と座っていたが、につこり笑って唇
を広げ、頬をゆるめ、上目使いに「ああ違うんだなあ、
貴公らの薬の与え方は」と、いった。

三教指帰 巻の下 仮名乞児の論

懐いを写くの頌

無常を観るの賦

生死海の賦

三教を詠う詩(十韻の詩)

仮名乞児という者がいた。どういう人であるかはよく
わからない。草葺きの家に生まれて貧しさの中で育ち、
俗世を捨てて仏の教えを仰ぎ、苦行していることだけは
確かである。

黒髪を剃り落として頭は銅の瓶のように艶々して
いるが、色艶はすべて失せて金属を溶かす埴塙のようにな
かさかさしている。姿形は痩せこけて体は小さく、長
い脚は骨張って池の端の鷺の脚のようであり、すくめた
首は皮膚が輪をなして泥の中の亀の首に似ていた。

「今まさに、儒・道・仏三教を明かにして、十韻の詩
を汝らの俗謡に換える」と。

そこで詩を作った。

十韻の詩

